

(實際の手紙では、宛先と筆者名は手書き、各ページにイニシアルを記す)

朝日新聞 東京本社 社説室 原発担当 御中

長瀬隆

拝啓

貴紙の最近の二つの社説『「トイレなきを原発」直視を』(7月31日、副題「核のゴミ処分」)および『「脱原発」土台に再構築を』(8月13日、副題「エネルギー基本計画」)を読ませていただきました、原発を現行のウラン軽水炉のみと考え、それからの脱却を説く論旨に違和感を覚えましたので、私見を述べさせていただきます。

原発は確かに現行のものは世界的にウラン軽水炉のみですが、これは長期にわたって続いた冷戦の負の遺産であります。その出発時には他にトリウム炉があり、両者の相違は前者が副産物としてプルトニウムその他の有害放射性物質を出すのに対し、後者が無視してよいほどにそれらを微少にしか出さないことにあります。もともとプルトニウムは長崎原爆に使用されたことから知られるように、核兵器には有用であり、これを重視する冷戦勢力にとっては、米国においてもまた旧ソ連においても必要だったのであり、逆にトリウム炉はそれを欠いているがゆえに無用、無価値でありました。

米国におけるウラン軽水炉は当初原子力潜水艦のエンジンとして造られ、その生みの親は国立オークリッジ研究所所長のワインバーグであります。彼は、しかしながら、潜水艦においてはともかく、陸上の商業用原子炉においてはトリウム溶融塩炉であるべきであるという思想の持ち主でした。かくてトリウム溶融塩の開発に努め、60年代初頭には試運転で大きな成功を収めております。しかしウラン原子炉に利害を有する軍産政連合勢力の圧量と策謀により、その研究を停止せしめられました。この結果、原子力潜水艦が陸上に上陸したかのようなウラン軽水炉が原発業界を独占するに至り、全世界に広まり、日本にも輸入されたのであります。

ワインバーグは自らが係わったウラン軽水炉が事故を引き起こしそれが過酷なものになるであろうことは予測しておりましたので、ウランを悪魔メフィストフレスの教唆と罵り憂鬱症に陥り、ORNL所長を解任させられております。救済も求める精神状態になり、1991年には広島を訪ね、その卓越した紀行文を含む自伝『The First Nuclear Era』(1994)を著しました。己が生きた核時代を冷戦に歪められた第一期のものと規定し、次に

来る第二の時代をトリウム溶融塩炉が人類に幸せをもたらす真正なものになると想定したものであります。中国ではとうの昔に全訳されているにもかかわらず、わが国では部分訳がなされているにすぎませんが、真の名著であります。

わが国でワインバーグの仕事に注目した最初の人は古川和男（1929～2011）であり、彼は米国で挫折せしめられたその業績を引き継ぎ1985年にFUII（不二、富士）として理論的には完成、内外の反響をよび、一般向けにも2001年に『「原発」革命』（文春新書）として公表しました。ウラン軽水炉は革命されるべしとしたのです。そして福島原発事故の2011年にはその増補改訂版である『原発安全革命』が「この原発であればチェルノブイリもフクシマも無かった」の帯を付して再刊されました。

私は、妻が大分市中島で古川家とはごく近所に生まれ育っております。もともと古川家は戦後数年して大分市を去り、彼女も久しく同家の消息は知りませんでした。一方彼女は敗戦時たまたま滞在していた広島で原爆に遭遇、その後大分市に帰り、県庁に勤務、1956年の第二回原水爆禁止世界大会の長崎会場では代議員として演壇に立ち、この会場でなされた日本被団協の結成発足に参画、大分被団協の初代事務局長になっております。こえて1959年にウィーンで行われた世界青年学生平和友好祭の日本代表団に日本被団協代表として送られ、これに加わっていた私と会い、翌年2月に結婚しました。その経緯については、1989年刊の私の小説としては第2作の『ヒロシマまでの長い道』に記しました。この前後に古川家では和男氏の弟の雅章氏が拙宅に幼馴染の妻を訪ねてみえ、私はこの弟氏の口から兄和男氏のトリウム溶融塩炉について聞く機会をもちました。しかしその意義については不得要領だったと言わねばなりません。

私は、1985年に発足した日本原水協の流れをくむ市民平和運動の団体、平和事務所の活動に従事、1986年のチェルノブイリ原発事故に際し、軽装備で除染作業に動員せしめられ被爆した、バルト三国の青年と医師の広島大原医研への招致に係りました。1991年には彼らの招致をうけ、同原医研所長らと同地を訪ね、リトアニアではチェルノブイリと同型の原発を見学、ミンスクとキエフでは被ばくたちと親しく接しました。またこれを契機に日本で起こっていた反原発運動にも係わりをもちました。しかし日本の原発については安全神話に欺かれていたふしがあったと認めなくてはなりません。2000年、弟の雅章氏に案内されるようにして当の古川和男氏が見えたのですが、所用があったので挨拶しただけで、その学説を直接聴く機会を逸しております。もともこの間遊び暮らしていたわけではなく、著作の発表はしてきております。すなわち『ヒロシマまでの長い道』の続編である『微笑の沈黙』（1996）、最初の小説『樺太よ遠く孤独な』（1984）の続編である研究『日露領土紛争の根源』（2003）、ペレヴエルゼフ『ドストエフスキーの創造』の翻訳（1989）およびその発展形の『ドストエフスキーとは何か』（2008）などです。また早大での恩師、ドストエフスキー学者・平和運動家だった松尾隆・木寺黎二についての雑誌連載（1998～2000）の評価があります。

2011年に3・11があり、すでに『「原発」革命』を贈られていた妻（1985年以来

人工透析で暮らす）は、その増補改訂版である『原発安全革命』購入。私も気になっていたので取り上げて読み、愕然とし打ちのめされました。氏とお会いし、氏が年末に他界され、その後一書を企画することになり、2014年8月に『トリウム原子炉革命——古川和男・ヒロシマからの出発』を著すことになりました。

執筆にあたって古川和男とは対照的立場にある人として注目した人に元東京電力副社長の豊田正敏氏がおりました。福島1号機の導入に先立って、事故の際にそれがもたらす巨大災害に思いをいたし恐怖を表明しながら、立場上仕方なく観念してその操作運転に従事、やがて安全性を確信するに至り、事故前年の10年朝日「私の視点」（11・9）では、残る問題として高速増殖炉もんじゅについてのみ中止を要望する文章を発表していた人です。原発業界では、教科書的著作の執筆・編集者として指導的な立場にありました。古川和男とは面談しており、古川から厳しく批判されたと聞いております。ただし事故後は己の不明を恥じ、古川学を承認する発言をNHKの取材に対し行っておりまして、私はそれを自著に収録し自説を展開しました。翌2015年3月15日の朝日の「私の視点」は文字通り「トリウム溶融炉の採用提案を」を表題としており、私は非常に好感をもちました。先の文に引き続きものですが、その全文（本状に添付）は古川学の肯定であるとともに、その遺志を受け継いで活動しているトリウム・テック・ソリューション（TTS）に対する支持の表明でもありました。

核兵器以外にはなんの使用価値もないプルトニウムの償却処理が問題提起され、「プルトニウムにトリウムを混ぜた混合燃料を軽水炉で燃やす「トリウム軽水炉」の採用」が提案されていますが、これはChemical Reactor in Nuclear ReactorをR in Rと略称して、私たちのTTSがすでにノルウェイで（現在はカザフスタン）取り組んでいたものでして、拙著では紹介ずみのものでした。しかしかつては古川和男とのあいだで確執があったにもかかわらず、いさぎよく己の非を認め、今やトリウム炉を「良いことづくめの原子炉」と承認したのであって、立派な態度だと感服したのです。冒頭に掲げた朝日の本夏の原発関連の二つの長大な社説は、古川和男著を知らないのはいた仕方ないにしても、せっかく豊田正敏氏の文を「私の視点」に掲載しながら、これを看過もしくは無視して執筆されたものでありまして、まことに残念かつ遺憾であります。

資源としてはウランを排してトリウム、固体ではなく液体の溶融塩、炉の小型化の三つが古川学の特徴であり、彼はそれによる以外に人類と世界の救済はないと確信し、語っていました。そしてそれが「受け入れられずに来た理由」を自問し（『原発安全革命』20頁）、「合理的に正しい技術も、人間社会のさまざまな動きの中で、ときに不当な扱いを受けることがある」と自答しました。

この言葉はドストエフスキー研究者でもある私に、『カラマーゾフの兄弟』の序文の言葉を想起させるものでした。彼は作品の主人公をキリストの再来と見立てながら、それが「一

風変わった人物、むしろ奇人である」ことを強調し、「奇人が必ずしも特殊で孤立的でないばかりか、奇人こそが時によると全体の核心を自らの内に宿し、逆に同時代の残りの人々が、ある風の吹きまわしによって、ひとり残らずなぜか一時その奇人に背を向けるといった場合がよく見られるからである」と記しているのです。つまりキリストは弟子たちにも逃げられ、十字架上で孤独に殺害されたわけですが、後に復権（復活）しました。私はワインバークと古川和男のウラン軽水炉との関係はこれに該当すると考え、拙著を執筆しました。しかしその際なぜ「ヒロシマからの出発」を副題に必要とみなしたのでしょいか。

フクシマ以後明白となった事実——わが国（だけではありませんが）の反核・核兵器廃絶運動が必ずしも反原発ではなく、むしろ容認してきたことが挙げられます。また反原発かならずしも反核ではありませんでした。古川和男は出発点から原爆に使用されたウランとプルトニウムに忌避をおぼえトリウム溶融塩の探求に向かっていて生涯にわたりぶれることがありませんでした。

奇人としか言いようのない古川和男の生きざまの原点には、広島1・3キロ地点で被爆、戸坂村（当時）に収容され、年末にやっと大分に帰還した幼馴染の女性を見ていたことが在ったに相違ないのです。後に私と出会い、『ヒロシマまでの長い道』の女主人公となった女性の惨状の目撃から出発しているからであると確信されたのでして、それ故に副題としたのでした。またそれは、ウラン軽水炉がそのプルトニウムによって核戦争を助長するのたしいし、それを根絶することによってそれを阻止することを示すためでもありました。

わが国の保守政界おける米ウラン原発の性急強引な輸入促進者には、それが産出するプルトニウムをもって将来の日本の核武装に備えんとする「深謀」があった、と疑いうる根拠があります。その勢力が歴史的に改憲勢力を構成し、今日ますます露骨にそうであるのは偶然ではありません。対するに、わが古川トリウム溶融塩炉はその『原発安全革命』の第一〇章「核兵器完全廃絶の道」に明白に主張されているように、現戦後憲法を強固に擁護するものであります。「核エネルギーの平和利用が核兵器完全廃絶に支障をきたすことのない合理的核産業技術論を整備すべきである。これは世界に冠たる平和憲法をもつ日本人の責務と思う」と古川は述べております。逆に言うならば、現行のウラン原発（軽水炉）は日本国憲法に抵触し逆行するものだったのあります。その再開を目指す勢力がおしなべて改憲論者であるのは、その事実を明らかにするものです。

フクシマに懲りず、現行の原発の再稼働を目指す勢力が安倍内閣を誕生せしめたのです。それが国会で強引に通過せしめた共謀罪は、反原発勢力の封殺のためだと考えますと、これは理解しやすくなります。その特徴は反民主主義と秘密主義であります。

貴朝日社説は結びで「世界の電力投資先は、すでに火力や原子力から再エネに主役が交代した。国際的な潮流に背を向けず」云々と述べておりますが、これは誤りです。添付した資料のうちの、昨2016年10月の共同通信の配信（中国新聞、東奥日報など主要地方10

紙が掲載）を見ていただきたい。国際原子力機関（IAEA）はトリウム溶融塩炉に特化した国際会議をウィーンの本部で行っており、私どもの代表は出席し討議に参加しております。

トリウム・テック・ソリューション（TTS）は本年6月21日国会内において自民党代議士ら250名が参集した大型の勉強会を行い、決議を採択しました。共同通信によって配信されております。

8月15日の日本経済新聞（添付）の報道にありますように、TTSはカザフスタンにおいて先に述べたRinRの実用化のための照射実験に入っております。これは現行の原発を「トイレの有る原発」に改造する試みであります。私たちは再稼働するすべての原発にこれを配備せしめ、プルトニウムの産出を阻止しつつ、蓄積している全プルトニウムを消滅したいと考えています。この技術を所有しているのはわがTTSだけと自負しております。

NPOトリウム溶融塩国際フォーラム（ITMSF）は来る9月9日長崎において「トリウム溶融塩国際フォーラム長崎セミナー」を行います。講演者は鈴木達治郎（長崎大核兵器廃絶研究センター長）、木下幹康（NPO理事長、TTS専務）、吉岡律夫（NPO名誉理事長）です。私もまた討議に参加し、古川和男のトリウム溶融塩炉の道が被爆者の願いにもっとも一致することを説こうと思っております。

プルトニウムが原爆に使用された地で、当面の課題であるプルトニウムの全世界的な規模での抑制と消滅の狼煙をあげたいと念ずるのです。ご協力願えたら幸いです。

なお別便にて先に挙げた拙当該書2冊を謹呈させていただきます。

敬具

2017年8月23日

ITMSF会員、TTS株主、著述業

長瀬 隆

川崎市宮前区有馬1-10-24

044・855・3768／080・6848・9970

<http://nagasetarhou.my.coocan.jp/>